

▽第四、時局に關係せしもの。 絶對にいけぬといふのでは

ないが、よほど傑作でなくては注意を惹かぬ。總じて際物的のもの、高い好尚に適應せぬものゆへ、多大な力を用ふるは骨折損であらう。

▽第五、色の俗悪なるもの。 即ち色の幼稚なるもので、金銀

や、赤とか緑とか、華々しい色を澤山塗りたてた、けばくしいものである。そのやうな強烈な色を、よく調和させるとは、中々困難な仕事で、失敗は免れぬ。併し、あまりに高尚ぶつて、濛い色許りて仕上たのも、共にいけなかつたらしい。

▽第六、不自然なるもの。 遠近法や陰影の間違ひの不可なるは勿論のとして、委員中の日本畫家連には考證論さへ出た位いてあるから、歴史的人物など描くには、此點にも注意を要するのである。

▽數へ立ればまた澤山あるが、要するに趣向が奇抜で、圖柄が高尚で、且其取材は日本的に、色彩は強くしておちつきあり、全體の調子がよく引締つて整つてゐて、誰れの注意をも惹くとの出来るやうに描けば、當選疑ひなしである。

*

**

*

**

*

**

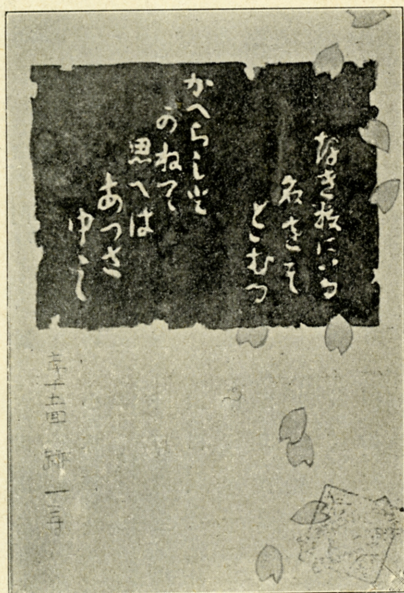
夜の誓古

よ
ち

私共待ちにまちたる好時節到来、山に紅葉をさぐるもよく、水に蘆花を寫すもよく、こゝ二ヶ月の間は彩筆ことに忙しかるべく候。かく我等の喜び狂ふに引かへ、君には日に／＼に晝の間短かくなりゆくに、勤めある身には三脚たつるひまも殆どあらじと啣ち給ふ。實に常日頃この道のみ楽しみ給ふ君の御事とて嗚々口惜しくも思召さるべく存候。近頃は朝の一時間夕の半時間を僅に寫生に慰め給ふよし、御勉強のほど我等の切に耻入るところに御座候。思ふに曉、夕の風は膚に寒かるべし、さばれ清く澄める空の色は秋の朝に於て見るべく、霧こめてしめやかに樹も草も消えては現はるゝ露けきありさまは、秋に於て尤も美はしかるべく候。ことに夕陽の雄大にして色も形も變化に富めるは、ひとり此季節に於て見るべく、此際に於て朝夕の御研究は、たとへ僅かの時間なりとも益する處極めて大なるべしと存候。猶夜ながのつれ／＼を空しく送り給はじとなれば、一二時間墨繪の御研究もよろしかるべきか、墨繪なれば、鉛筆にても木炭にても、燈の下にて充分描き得べく候。また毛筆練習のため彩畫をとの思召に候へば、セピア、ニエトラルチント、其他何にても強き暗き色にて、一色畫を御試みに相成候はゞよろしかるべく候。寫生の材料は、最初は可成一色のもの、假令ば素焼の壺とか鐵瓶とかを選び、形と陰影を極めて正確に寫し、其調子を悟り、漸々色の多種なるものに及ぼさるべく候。

勿論此際とても、其色を見ずして單に明暗の調子にのみ注意して御寫し被遊候はゞ、自然に丸味のつけ方、影の工合など覺へ可申候。寫生の方法は、晝間の靜物寫生と同じく、寫すべきもの、後には無地の紙又は布を垂れてバックを作り、其品の大小に應じて適當の場處に晝架を据へらるべく候。燈火は物の所在と、自己の手許と二個あれば

申分無之候へ共、机の上などにて小さなもの御寫生の時は、一つにても間に合可申候。材料をてらす燈火の位置は、なるべく陰影の調子の面白くなるやうに可然御工風ありたく候。かゝる寫生は最初こそ甚だ無趣味の感有之候へ共、飽かず御勉強に相成候へばおのづか自から興味を生ずべく、他日戸外寫生試み候わりには、少なからぬ助たすけと可相成事確に御請合申上候。右は時節柄思つき候まゝ御參考迄に得貴意候以上。



に溝の中へ叩き込まれて、散々な目に逢つたとき。

スケッチブック

K. S. K.

○老大家某、秋の一日を三河島に三脚を据へて、連りに筆を働かしてゐた。すると近處の百姓らしい、生意氣げな若物が後に立つて見てゐたが、無遠慮にも、帽子に觸れ、脚に障り、邪覓になつて仕方がない。そこで先生、いつも旅行先で田舎者を叱り飛す調子で「お前たちに、わかるものぢやない。さつさと往け！」とやツつけた。處がこゝらあたりはお江戸に近く、人氣もよくない處で、アーチストを恐多いものとも思つてゐない兄さんだから堪らない。「何！此馬鹿野郎」と言ひながら晝架に向つて突進し、今しも出来かゝつた大事の／＼の晝をうち破らんず見事に、老大家も大閉口、俄に惜げて散々謝罪して、晝だけは無事に取止めたが、帽子は終

* * * * *